

---

# A willful novel

ポペ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A w i l l f u l n o v e l

### 【Nコード】

N 2 1 4 9 P

### 【作者名】

ポペ

### 【あらすじ】

作者の気まぐれで投稿する超不定期な短編集です。恋愛が多く、コメディ、下ネタが次に多いです。てか、恋愛以外ほぼ下ネタかも

W  
W  
W

## 叫び

誰かが言った。“人が見る夢だから儂いんだ”と。

銃声が鳴る。悲鳴が響く。悲鳴を掻き消す歪んだ笑い声。歪んだ笑い声を掻き消す爆音。爆音を掻き消す俺の叫び声。

俺の胸にある小さな身体。肩まで伸びた黒く細い髪。小さな肩。細い腕。痩せて骨が浮かび上がっている上半身。細い足。触れたら最後、壊れてしまいそうな優しい顔をしているお前。少し前までは普通の体型。いや、全ての異性が振り返るほどの美貌を持っていたお前がいま俺の胸のなかにいる。

顔に、胸に、足に無数の穴を開け俺の目の前で倒れた。声もださず……。

お前との出会いは大学だったな……。みんなの視線の先にいたお前。たまたま全ての講座が一緒に仲良くなったな。お前と付き合えることになったのは奇跡だとおもっ。神に愛されたような外見。さらに素晴らしき才能の数知れず。

それに比べ俺はどこにでもいる普通の男より少し下。ルックスも頭も。

なんで俺なんかを選んだのかを聞くといつも話をそらしたな。お前が早く言わないから結局わからないままだ…。

数年前に始まった第三次世界大戦。いまどこの国が勝っているのか、誰か生きてるのかもわからない。ただ、ずっとお前と逃げていた。そのお前がいなくなった今、俺はどうやって生きていけばいいんだ？

俺はまだお前を抱いたまま座りこんでいる。また銃声が鳴る。悲鳴が響く。悲鳴を掻き消す歪んだ笑い声。歪んだ笑い声を掻き消す爆音。しかし、今度は爆音を掻き消す俺の叫び声はなかった…。

## 今日は今日、昨日は昨日

「……いいか、沙織<sup>さおじ</sup>。泣つてのはな本当に信用できる人か、本当に好きな人の前でしか流してはいけないんだぞ？ わかったか？」  
「うん！ わかった、さおり！！」

私は、本城沙織、十六歳の高二。

子供のときによくお父さんに聞かされたこの言葉。お母さんを幼いときに亡くした私はお父さん一人に育てられた。他に兄弟はいなくことあるたびにお父さんに相談し、お父さんの前で泣いた。最近には相談もしなくなった、というか話す機会も少なくなっている。

「おはよう、沙織」

「おはよう、美紀<sup>みき</sup>」

この子は美紀、私の親友。

「どうしたの？ 今日、やけに機嫌いいじゃん」

「ん〜、そうかな？」

「そっだよ〜、渉君<sup>わたわ</sup>となんかあったの!？」

目を輝かせて聞いてくる美紀。渉は私の彼氏、高一の夏から付き合っている

「なんもないよ、ちょっと昔の夢を見ただけ」

「ふーん。で、どんな夢？」

「ピ・ミ・ツ」

「教えてヨ〜。それとも人に言えないようなエッチな夢？ 渉君と初めてチューした夢とか？」

「ちがいますー！ ほら、急ぐよ、チャイム鳴ってるし！！」

なんとかホームルームに間に合った。一時間目の用意をしようと机に手を入れると、中から封筒が落ちてきた。

中を開けてみると、渉からだった。内容はお昼に屋上に来てくれとのこと。なんでメールにしないんだ？ まあいいか。

昼休み、渉に言われた通り屋上にいくと渉と美紀がいた。

「……沙織、悪いけど別れてくれないか？」

いきなりの別れ話。正直頭がついていけない。

「俺、少し前から美紀のことが好きだったんだ。俺たち付き合っことにしたんだ」

意味がわからない。美紀は小さく「ごめん、沙織」と呟き下を見つめている。

……、頭で理解はした。でも、その事実を認めたくない。

「な、なにそれ？ ジョーク？ 笑えないよ」

自分で違うと解っている。渉の目は真剣そのものだ。

「ごめん、沙織……」

「もういい！！」

そう言っって私は屋上を、学校を飛び出し家に向かった。

家に着くと鍵は開いていた。

お父さんがいるのかな？ まあいい。

私は足音をたてながら二階にある自分の部屋にむかった。

いきなりドアが開く音がした。少しびっくりしたがすぐに足音で沙織だとわかった。しかしなぜこんな時間に帰ってきたんだ？

すこし不思議に思い娘の部屋の前に立ち、声をかける。

「沙織、どうしたんだ？」

反応はない。……しかたない入るか。

一言声をかけてから部屋のドアを開けると、ベッドの上で布団に顔を押し付けている沙織の姿が目に入った。

昔から泣くのを我慢するときとる体型だ。

「どうしたんだ、沙織？」

もう一度聞く。案の定返事はなし。しゃべると泣いてしまうのだろつ。

「……なあ沙織。昔俺が話したこと覚えてるか？」

泣っているのはな本当に信用できる人か、本当に好きな人の前でしか流してはいけなかったの。

俺はおまえにとって信用できない人間か？ おまえは俺のことが嫌いか？」

言い終わる前から力なく首を横に振っている沙織。

そんな娘を見て俺はベッドの上に座り娘を抱き寄せた。

部屋のノックも、お父さんの声も聞こえていた。でも返事をできなかった。したら、泣き出してしまいそうだったから。

お父さんが部屋に入って来て夢でみた昔と同じ言葉を私に投げ掛け、どこか寂しそうな声色で聞いてきた。

「俺はおまえにとって信用できない人間か？ おまえは俺のことが嫌いか？」

そんなことない！ そう叫びたかった。でも声がでない。首を横に振ることしかできはかった。

お父さんがベッドに座り、私を抱き寄せる。私は反抗しないでそのまま抱き寄せられた。顔をお父さんの胸に押し付けて泣いた。

どのぐらい経ったんだろう。もうでる涙もなくなるほどに泣いた私は慌ててお父さんからはなれた。いくらお父さんしかいないとはいえ、恥ずかしくなった。でも同じぐらい感謝もしている。

「ごめん。……ありがとう」

そう言つとお父さんは黙って頷いて部屋から出ていった。

次の日の朝、美紀と会った。美紀は走って逃げようとしたが呼び止めた。

「美紀！」

「……、なに沙織」

「気にしないでいいよ。もう吹っ切れたから」

そう言つて啞然としている美紀をおいて一人で学校に走っていった。

さあ、今日から新しい毎日はじまる。楽しまなくっちゃ！！



いま会いに……

もう君はいない……。

僕はいまいつもの駅のホームにいるよ。いつも二人でこのホームのこのベンチで手をつないで終電までいたね……。いまはもうできない……。い……。

なんで？      なんで君が。      なんで僕じゃなかったんだ？      なんで？  
なんで？

.....。

もうやめよう。僕は君を忘れることはできない。君との思い出を乗り越えて生きていく勇気も強さもない.....。

おやすみなさい。眠。いままでありがとう。

いま、会いに行くよ。これで君とまた会える。嬉しいな。いま会  
いに行くからね。

## 距離

開けた窓からいつもと変わらない無機質な校庭が広がり、少し上を向けば青い空と白い雲、そしてさんと輝く太陽が見える。うん、平和が一番だ。

「ちょっと中村くん！ちゃんと私の授業を聞いてください！！」

本日何度目になるかわからない先生からの注意。

……春先でいい感じに日が射している窓際の席で、授業を聞けというほうがどうがしてると思っているのは僕だけだろうか？ いや、そんなことはない！

……反語を使ってしまったのは古典の授業だからだ。決してカッこつけたわけじゃないぞ！

## キーンコーンカーンコーン

いつもと同じ授業の終了を告げる鐘の音。さあ、これから僕にとっての大切な時間の始まりだ。

やって来たのは机と椅子が五つだけ置いてある我が学校で多分一番小さな教室。表札には将棋部と書かれている。

表札通りここは将棋部の部室だ。部員名簿には六人の名前が書かれているが実際は二人しか来てない。いわゆる幽霊部員が四人いる

ということだ。しかも、顧問の先生はほとんど来ないからいつも一人きりだ。

「ちーす！ おお、相変わらず早いね、中村くん！！」

高校生にしては少し高い声が部室に響く。振り返ればそこには平均よりやや低めで、ショートヘアで中性的な顔立ちだから、服装によつては男子に見えなくもない我が部の部長が立っていた。

「こんにちは。部長も早いですね」

「はっはっはっ、褒めてもなにも出やしないぞ、中村くんよ！」

この人のこの甲高いとも言えなくともない笑い声が、この見た目からは想像できない男っぽいしゃべり方が、飾り気のない見た目と性格がなぜか僕は好きだ。

「さあ、手始めに軽く打ち合いましょうか」

「おうよ！ 手加減はなしだぜ！！」

……軽くつて言ったのにな。相変わらず話が通じないな。まあ、いいか。

開けた窓から優しい太陽の光とそよ風が入り込む小さな教室で、今日も今日とて大好きな人との大切な時間を過ごす僕の姿があった

⋮  
○

「ヒマだ……。カツヤなんか面白いことないか？」

「ねえーよ。メグミはなんかねえーのか？」

「ないわよ……」

「なあ、カツヤ。いまなにを考えている？」

「どうせ、エッチなことでも考えてたんでしょ？」

「いんや。ただ、メグミのおっぱいがまた大きくなったなあ〜って」

「さ、さいてえー！」

「バコンー！」

メグミの渾身の右ストレートがカツヤの左頬にクリーンヒット！  
！カツヤは125のダメージを食らった！カツヤのHPは0になっ  
ったー！！

カツヤは永眠に入った！！皆さん、彼のために一分間の黙想を

……

「されてたまるかー！」

ちっ！ナレーションに逆らうとはナマイキなガキだ！！

「うるせー!」

「カツヤ、なに一人でわめいてるのよ?」

「や、なんでもないです……」

「なあ、あれやるか。皆の手を重ねて、一番下の人が手を引いて上に乗せてる人の手を叩くやつ」

「おっ、いいね。やるぜー!」

「メグミは?」

「もちろん、やるわ!」

「それじゃ、最初はいいだしっぺの俺が一番下をやる」

「よっしやー!」

10秒後。

バチン!

「つてー!」

「ははは、カツヤよっわーい」

「くそ! もう一回だ!」

「もっかい!」



5秒後

バチン！！

「つてー！！」

「ははは、なに机叩いてんのよ！」

「う、うるせー！ やめやめ！！ 椅子とりゲームやるっぜー！！  
椅子とりゲーム！！」

「仕方ないわね」

「それじゃ、俺のケータイのメロディーが一曲終わったらスタート  
でいいよな？」

「うん！」

「おうよー！！」

30秒後

「この椅子もらったー！！」

「そうはさせるか！」

タツロウがカツヤが座ろうとした椅子を勢いよく引いた！

ズドンー！！

勢い余って、バカ（カツヤ）は床にずっこけた！ 12のダメージ！ カツヤのHPは0になった！！ カツヤは永眠にはいつ

「てたまるかー！ だいたい12のダメージでHP0ってなんだよ！！ どんだけ俺のHP低いんだよ!?」

カツヤのHPは6ですがなにか？

「低くすぎるだろー！ 幼稚園児でももつとあるだろー!?」

幼稚園児の平均HPは30ですがなにか？

「たかつ！ 幼稚園児、俺の五倍かよ!?」

なにか問題でも？

「うがー！ 問題ありまくりだー!!」

「か、カツヤどうしたの？ さつきから一人でわめいてるけど……?」

「カツヤ、黄色い救急車を呼んだほうがいいか？ 番号はおさえてあるから呼べるぞ?」

「いやいやいや、別に俺は精神異常者じゃないから!! 黄色い救急車に乗る必要はないから!!」

「そうか？ 残念だな……」

「え、残念ってなにさ？ 雰囲気的に俺、乗んなきゃいけない感じ

？ マジで？ ねえ、なんか言ってるよ！？」

「よし、メグミ。帰るか！」

「そうね！ 変な人と関わっちゃいけないってよく小学校の先生にも言われたしね」

「えっ？ 変な人って俺のこと？ マジで？」

そうして精神異常者<sup>カッヤ</sup>は一人教室に残されたのだった。

「残されてたまるかー！！ おい、待ってくれよ！！ タツローくん  
！？ メグミちゃん！？」

## ミレン

なんでもないと

なんかあるとき

ダメになりそうとき

しわせなとき

いつも、いつしよにいたアナタはもういない……

アナタはほかのヒトといつしよになったから……

ワタシをおいて

ワタシをおいていったんだからしあわせになってよ

ワタシをおいていったんだからしあわせになんかならないで……

ワタシはアナタをまだ……

ワタシがアナタをわすれるまでしんでいて

アナタはワタシのことをおぼえていて

アナタがワタシをわすれたときワタシはまえにすすむから……

男は皆狼なのだ！

ここは地球とはちがう世界。いわゆる異世界。もちろん異世界の代名詞とも言える魔法も存在する。そして、魔道具というものも存在する。

さて、前置きはこのぐらいにしておこう。そろそろこの物語の主人公を紹介しよう。名前はリック・クワイアンス。冒険者だ。

彼はいま、とある魔道具屋にきている。

「よお、店長。なんか面白いもんねえか？」

なんとも偉そうな物言いである。だがこの道数十年の白髪混じりの店長はリックの態度き嫌な顔一つせずにリックの相手をする。

「面白いものですが……。そうですね、これなんてどうでしょうか？」

そう言って店長が出したのは狼の小さな置物だ。

「これのどこが面白いってんだ？ ただの置物じゃねえか」

「ふふ、それが違うんですよ。ここを教えてみてください」

そう言って店長は狼の頭を指さした。

リックは怪訝そうに狼の置物の頭を押した。

『ぐへへ、お嬢さん。男は皆狼なんだから気をつけな』

なんともいやらしい男の声がでてきた。

「な、なんだこれは!？」

「これはですね、録音魔道具を備えているんですよ。さらにもう3パターン<sup>①</sup>のセリフがあるんですよ」

「な、なんて面白いもんだ! 買った!！」

「毎度どうもー!」

なんていらぬ買い物をしているんだか……。だがリックはそう思っていないらしく狼の頭を押している。

『お嬢さん、おいちゃんとニヤンニヤンしねえか?』

『夜道にや気おつけねーといけねーなあ。俺みたいな狼がいっぱいお嬢さんを狙ってんだからなあ〜!』

『た、たのむ! 一発やらせてくれ!』

これが狼に録音されている音声である。……一番最後だけなんか違う気がするが気にしない方向で行きましょう。

「他にはなんかあんのか?」

リックはまだ買い足りないらしい。

「ふむ、そうですね。これなんなんかどうか?」

店長が出したのはフオーザ様も持っていたスカウターのようなものだ。

「これって戦闘力を測るやつだろ?」

「戦闘力は戦闘力でもただの戦闘力ではないんですよ」

ニヒルな笑みを浮かべながら店長は続ける。

「これは……」

「こ、これは……?」

変な緊張感が店の中に生まれ、リックが生唾を飲む音が響く。

「これは夜の戦闘力を測るものなんですよ!!」

心なしか店長がはしゃいでいるように見える。男は皆狼というのはあながち間違いではないのかもしれない。

「な、なんだとー!!?」

バカ(リック)の叫び声が店に響きわたった。

「おいおいおい店長! これは世紀の発明品じゃねえーか!!」

「まあまあ、落ち着いてください。使い方は普通のと同じです。あと、これはその男の最大弾数まで表してくれんですよ!」





勇者（俺）、魔王（お前）

俺はブレイ。二十八歳。職業は冒険者だ。

でも周りからは、勇者だとか英雄だとかそんな感じのことを言われている。

そして俺はいま、魔族を束ねる魔王がいる魔王城にきている。  
純白の衣タキシードで身を包み、右手には深紅の花束を。

「うん、準備は万端だ！」

よし、今日こそ！ 今日こそは絶対に！！

「魔王よ！ 俺と付き合ってくれ！！」

そう、俺は魔王に恋する勇者だ。ん？ そんな勇者イねーよって？  
？ それがいるんだよ、ここに。

俺が勇者と言われる由縁は今までに三回魔王と言われた者を殺つたからだ。

一回目の奴は、おっさん魔王で、二回目は狼の顔で鷹の体の魔王で、三回目は優男の兄ちゃん。

そして今代の魔王こそ！ 俺の！ 運命の女性なのだ！！

「さあ、魔王よ！ さあ！ 返事を！！」

「はあ、また主か……。何度も言つたろう。魔王と勇者が付き合うなどありえんじやるお」

「そんなもの俺とお前の愛の前には関係ない！！」

「はあ、いい加減にせえ」

む、なぜだ。なにがダメなんだ？ そ、そうか！ わかったぞ！！

「よし、俺は勇者を辞める！ それならば文句ないだろう！！」

「あのなあ、勇者とか英雄ってのは自分で名乗るものじゃないじゃろお。周りが言つて初めて勇者やら英雄やらになるんじゃないが…

…」

……どうしたもんか。俺たちの恋は！ いや、いやよく考える！

！

「立ちばかる壁はでかいほど愛は燃えるというわけか！！」

「……はあ。ええ加減に諦めえ。ワッチと主は無理じゃ、どうあがいてもじゃ」

「そんな、そんなことはない！ 俺達の愛の前に不可能などない！！」

「はあ、わかった、わかったから今日は帰れ」

……なぜだ、なぜYESと言ってくれんだ。俺のなにがいけないんだ。

「のう、勇者よ。ワッチは主のことは好きじゃ」

「な、なら…」



## 重要会議

「さて、皆さんお集まりになりましたかな？　では、会議を始めましょう」

「ええ、そうですね。今回の会議の議題は……童貞はお年玉をあげて善いかダメかです！」

「さて、この会議の結果によってはたくさんのチェリー君がココロに傷を負うかもしれません。なので皆さん、くれぐれも慎重に会議を進めてください」

「では討論開始！」

「はい、私は童貞でもお年玉をあげても善いと思います。いかに女と縁のない可哀想な人生を歩んできた野郎でもお年玉をあげなくてはやってられないとおもいます」

「私はダメに一票ですな。皆さんにお聞きます。皆さんは童貞野郎からお年玉を貰ったことがありますか？」

「おお、確かに……」

「いやいや、誰が童貞かなんか解からないでしょう」

「いやしかし、彼の言うことももつともだ。童貞からお年玉を貰った記憶は私にはない！」

「私もだ……。確かに曖昧な人もいるがきつと違つだろう……」

「で、では議長……」

「ええ、結果が見えてきましたね……。これまでの議論を考慮に入れてお答えください。童貞はお年玉をあげても善いかダメかを！」

「ダメ」

「ダメですな」

「ダメだ」

「私も歴史を尊重しダメに一票」

「議長、結果はでましたな……」

「ああ、では結果を言います。満場一致で童貞はお年玉をあげてはダメに決定!!」

「「「おお!」「」」

「これにて閉廷。またの機会に集まりましょう」

「なあ、こんな会議をしてなんになるんだ？」

「おいおい、そんなことを言うな」

「そつだそつだ、それを言ったらお終いだ!」

「まあ、そうだな……」

## 勇者？魔王？いやいや山賊です

僕の人生は空から落ちてきた鳥の糞によりメチャクチャになった……。

ある晴れた日の午後、いい天気だな〜と思い、空を見上げたら小さななにかが僕の顔面目がけて落ちてきた。それにビビった僕は目を閉じてしまった。

びちゃっ！

おーシット。これは糞だと思い、固く閉じた目をゆっくり開いて確かめようとしたら、なぜかザ・山賊って感じの人たちに囲まれていました……。

「小僧、なんの用だ？ こんな所に転移して来やがって？」

……周りを、山賊さんたちではなく、辺りの風景を見るとそこは山でした。……はい、可笑しいですね。僕はアスファルトの上にいるのに今は湿った土の上。なぜ？

「テメエ、黙ってねえで答えろっ」

とかなんとかいいながら、ナイフで襲ってくる山賊たち。もちろん、僕も抵抗しましたとも。勝てるとは思わなかったけど。でも何故か勝っちゃいました。

「……す、すいませんでしたー！！」「」「」

とかいいながらひれ伏す山賊たち。で、なんだか分からない内に山賊の頭にさせられた僕。

聞いた話じゃここは地球ではないようだ。うん、まあ現代には山賊なんてそんなないだろうしね。もっともこの世界には魔法もあるそうだ。

でもね、やっぱり思うんだ。異世界召喚っていったら勇者だったり、魔王として呼ばれるんじゃないの？ なぜ山賊？

「お頭ー！ 上物が来ましたぜー！！！」

「うん、分かったー！ いま行くよー！！！」

まあ、こんな生活も悪くないかな？ やってることは極悪だけどねっ



## 恋の常套手段

朝、私は布団に潜り込む。布団の中は温かく、レベル六十五の何気に強い眠気が私を襲う。

だが、私は負ける訳にはいけない。私にはやらなくてはいけない使命がある。その使命に従い私は、パジャマのボタンを上から順番に外して行く。

「あん、興奮し・ちゃ・う・わ〜」

だんだんと見えてくる彼の（・・）胸板が見えてくる。少し黒いまん丸の乳首が見えてきて、視線を下に向ければ割れた腹筋が。

「あん、相変わらずたくましいわ〜」

彼の腹筋を舐めながら首筋を舐める。

「ん、んあ?」

あら、そろそろ彼が起きちゃうわ。早くメインディッシュに行かないといけないわね。

腹筋を撫でていた手を下に、彼のシークレットスポットへの侵入に向かわせる。

「ふふ、今日もたくましいわあ〜」

太く堅い、彼のブツを一撫でする。

「くっ……」

あら、感じちゃったのかしら？ もっと気持ちよくして……。

「おい、くっ」

あら、もう起きちゃったの。もう少し楽しみたかったわ。

「毎朝毎朝、人の布団に入り込みやがって」

あら、貴方だって気持ち良さそうにしてたじゃない。

「何回言えばわかる」

あら、どこが敏感スポットかなんか聞いてないわよ、私。

「俺は」

俺は？

「女好きだっ！」

「あら、私だって」

「テメエの股間についてるのはなんだっ！」

「あら、いやだ。そんなこと乙女の私に聞く？」

「だいたい弟を襲うなっ、バカ兄貴っ！」

「あら、いやだ。お姉ちゃんよ・ん・ん・で」

「さっさと出てけ!!」

あら、今日も逝かせられなかったわ。明日こそ逝かせてあげ・る。

「ウィンクすんな!」

「はは、照れちゃって」

「うっせ!」

まっ、まだまだチャンスはあるから彼の初めては私がもらっわ。皆応援してねっ

## 謎

「なあ、えいちゃん」

「なんだ、ごろちゃん？」

「お前さ」

「ん？」

「ウォシュレット使ったことあるか？」

「ウォシュレットって、トイレのやつか？」

「ああ、それだ」

「……ないな」

「あ、お前も？」

「使わなくても紙を使えばいいかなって」

「俺も。でさ、あれ、使ってみたくね？」

「ま、まあな」

「でもさ、俺思っただよ」

「なにをだ？」

「あれってさ、うんちよして流してから使うのか、それとも流す前に使うのかってさ」

「……確か流す前だったと思うぞ」

「もし、もしそうだと仮定しよう」

「なんだ？」

「汚なくね？」

「は？」

「だからさ、うんちよが水と一緒に発射されんじゃね？」

「いやいや、勢いよく発射されるからうんちよは飛ばないんじゃないかな  
いか？」

「そうだとしてみさ、他の奴のうんちよが発射するやつにこびりついてんじゃね？」

「そ、それは……」

「な？」

「……よし、見に行ってみるぞ」

「は？」

「学校のトイレについてたはずだ。見に行ってみようぜ」

「お、おう」

\*

「よ、よし。スイッチを押すぞ？」

「お、おう」

ピッ

「おお、こうやって発射するやつがでてくんだな」

「あんまり汚れてないんだな」

「ああ」

ビュオオツ!!

「ぬおあっ!?!」

「うわっ!!」

「あー、水が天井まで届いてるよ……」

「びじょびじょだな」

「ああ……」

「俺はこんな危ないものを使う気にならんよ、えいちゃん」

「俺もだよ。ケツが3つに割れてしまいそうだからな」

「ああ、これからも紙を使おうか」

「ああ、そうだな」

制服！

「なあ」

「あん？」

「俺さ、大学生になってから思うようになったんだ」

「なにを」

「うん、制服って」

「おう」

「エロくね？」

「……」

「いやいや、そこ黙らないでよ！？」

「あ、ああ。いや、なに俺の他にもそう思う奴がいたんだって…」

「…」

「あ、やっぱり思うよな！」

「ああ、あの絶対領域といい、ワイシャツから透けて見えるあれと  
いい……！」

「そうそう！ あの見えそうで見えない丈がなんとも言えない興奮



を！！」

「わかるなあ、その気持ち！」

「ああ、なんで高校にいる内に気付かなかったんだろ」

「ホントだよなあ」

「あつ、そういえば今度」

「なんだ？」

「妹の高校の文化祭がある」

「行く！是非！行かせてくれ！」

「おう！」

人知れず此処に確かな友情が生まれたのだった。

めでたしめでたしWWW

## 勇者田中太郎

「これで終わりだあああつ!!」

両手で聖剣ピーカルを振りかぶる。

……うん、言いたいことは分かる。ピーカルって何だよ、だよね。僕も思ったさ。ピーカルってピカールの親戚？とか思ったさ。でももう考えるの止めたよ……。

いや、今はそれよりも大事なところなんだよ。

やっと魔王を倒せそうなところなんだよ。

「行くぞ！ 魔王マツウオ!!」

「クソがあああつ!!」

やっと、やっと魔王を倒すことができた……。

これでやっと王都キングダムに。

……僕の言い間違えではないぞ。本当にキングダムなんだよ!!

はあはあ、魔王を倒すことよりも君たちを説得することのほうが  
疲れるよお……。

無事、王都キングダムに着き、王に報告しパレードも終えた。

「これでやっと姫プーリエンスに求婚できる!!」

……なんだね？ プーリエンスはキレイなんだぞ！

愛称はプーちゃんなんだぞ！ プーさんみたいにまん丸でかわいい  
いんだぞ!!

「ああ、姫！ 私と結婚してくれまいか？」

あ、囁んだ……。

「あら、勇者田中太郎様」

ん？ 田中太郎は僕の名前だが？

「それは何かの冗談かしら？」

「じよ、冗談なんかではありません！」

「あら、そうなの？ では衛兵！」

「はっ！」

僕の両腕を掴み牢屋に連れて行く衛兵×2。

あれ？ 牢屋？ なぜに!？

「ひ、姫！ なぜなんですか!？」

「あら、既婚者に求婚するのは犯罪ですよ？」

「き、既婚者あ!？」

「あら、知らなかったのですか？ 私、つい先日ブータンと結婚しましたのよ？」

ぶ、ブータンだと！？ あの、豚のように太り、人を人とも思わない豚野郎と！？

「な、何故！？ 何故ブータンなんかと！？」

「まあ！ 私の旦那を侮辱するの！？」

「そ、そんなつもりは！！」

「もう、いいわ！ 衛兵！！」

こうして僕は既婚者への求婚、王族への侮辱の罪で殺されました。

めでたしめでたし。

ちゃんちゃん

ふざつけるなああああつあああつあああ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2149p/>

---

A willful novel

2011年10月7日08時27分発行